巻頭言

# 主体的な子どもたちを育てるために
# まず私たちが主体者になろう！

支部長　佐々木盛文（河内長野市立千代田小）

## １．はじめに

２０１９年度は、大阪支部５０周年を迎える前の年として、準備委員会から実行委員会を結成して、どのような区切りを迎え、どうこれからの５０年を展望するのかの年となるはずでした。しかし、２月ごろからの新型コロナウイルス感染拡大によって社会や学校が混乱の渦に巻き込まれることになりました。

## ２．突然の臨時休校

２０２０年２月２７日、安倍総理から突然の臨時休校の要請が出されました。各校では残された１日で何をしようかとてんやわんやになりました。私は教務主任として「各担任が今、必要だと思うことを考えて時間割を組んでください」というメッセージを出しました。別の学校では「できるだけテストをさせてしまおうとした」「とにかく楽しい思い出を創る取り組みをした」などさまざまな声が聞かれました。どうやら前者の意見が多かったように思います。

そしてこの３月から始まった休校は次年度の５月まで続きました。

## ３．あらためて感じた学校の主体性

休校中には卒業式、入学式が行われました。どのように実施するべきか、通知表はどうやって渡すか、新年度はどのように始められるのか、など本来は教職員が知恵を振り絞り、議論を重ねて決めていくはずでした。しかし、教育委員会や校長会とやらの決め事にそってその範囲内で決めていくことになった学校が多かったと思います。この間、学校の主体性はあったのでしょうか。教育活動は私たち教員が考え、決めていくという意識が私たち教員自体になかったことが何よりも残念なことでした。

## ４．同志会活動の自粛と活動

４月に入り全国で緊急事態宣言が発令されました。このことで体育同志会自体も活動を停止せざるを得ませんでした。同志会全国でも５月半ばまでの自粛を決定し、中間研究集会も中止となりました。大阪支部としても５月半ばまでの活動自粛を決めました。その中でも自分たちらしい活動を続けることを確認しました。支部ニュースは発行を続け、予定されていた例会もオンラインを含め、できるだけ開催していきました。大阪支部のライン上ではそれぞれの学校の情報を共有しました。常任会議も欠かさずに行うことができました。

## ５．コロナ禍以降の支部・ブロック活動

活動の自粛明けには予定されていた「おもしろ体育スクール」をオンラインで行いました。水泳についての例会でしたが、報告内容を絞り込んだ提案で、これからのオンライン例会の指針となる内容でした。次年度にはバスケット、跳び箱と引き継がれていきました。

さらに支部大会も例年の７月開催から１１月に変更して開催しました。この変更も今までの固定的な考えから新たな大会へと変えていくきっかけになったと思います。

この一年はどうしたらよいか悩んだ年でした。私たちは自分たちで知恵を出し合い、考え議論し、主体的に活動を行うことができました。そして支部５０周年を主体者としてむかえることになります。